



呂
1683
29

越後名寄卷第二十六目錄

从夷



交蛤 シラフキ
牡蠣 シラフキ
貝子 シラフキ
靈螺子 シラフキ
煙 シラフキ
千鳥貝 シラフキ
陽遂足 シラフキ

蛤蚧 シラフキ
棠螺 シラフキ
河貝子 シラフキ
貽貝 シラフキ
蟻蛭 シラフキ
鷓貝 シラフキ
海蕪 シラフキ

浅測 シラフキ
蓼螺 シラフキ
蜆 シラフキ
馬刀 シラフキ
即君子 シラフキ
朝船 シラフキ
海蛤 シラフキ

田螺 シラフキ
玉玢 シラフキ
加多之貝 シラフキ
寄居夷 シラフキ



歌仙貝

百種貝

鼈

蝸蚌

龜

擁

和尚魚

蠟

蟹

越後名寄卷第二十六

越後國寺泊

丸山元純良陳輯

介與

文蛤

花蛤

和名波萬久里

古へ云字牟木

頸城郡

柳崎濱ノ當リ川羽郡荒濱ノ辺

蒲原郡有明濱ノ内五十嵐濱折戸浦越前

小屋村

昔日自越前國引移り来村

ニ多クアリ大ナル者圓サ

三寸余者圓サ七八分殼甚厚ク甲扁ク淡黄

微紅ニ無紋之者ラウシ純褐色ノ者各油貝

又純白ニシテ無文者名耳白貝是ハ多クノ中
ニモ稀也赤美紋アリ者白殼紫唇ナル文花ト
稱スヘキハ最希也

八月十五夜曇レハ蛤蜊少ト俗ニ云

大蛤殼甚アツク堅シエ人切磋シテ作其石子テ
可宜蛤乱殼唯千万数皆齟齬不合故堪扇割
符 方諸高誘曰陰燧ハ大蛤也熟摩之向月大
十ハ千水生 大蛤之殼ヲ能スリテ煖ナラシメ月
盛ナル時ニムカヘテ水ヲ取銅盤ニテウケル水
数滴下ル是ヲ方諸ト云水晶ニテ日ニ向ヒ火ヲ

取カ如シ

蛤蜊

蛤ト同シ浦濱ニアリ大小有大ナル者二寸半殼ノ
色淡紅ニ淡黒キ有文

浅蜊

前ニモ云文蛤蛤蜊ニ雜リテ稀ニアリ大サ七八ト
紫班細黒花紋ノ輩アリ

鰆

石決明九孔螺 殻ヲ名千里光 和名阿波比
浦洋岩崖ニ在トイヘ共希也磐船郡海府ノ

浦々ニハ畧多シ貝モ又小也三四五寸形扁ク一
片ニシテ無對雄ハ肉之色白ノ微青シ肉之淡
紅ヲ雌トス味雄ニ優リ雌ハ長ク雌ハ圓シ何
レモ厨中ノ用ニ不足佐渡ヨリ來ル者ヲ常
用甚多ク渡ル

莖貝類ノ殻ヲハナシ木砧之上ニ置大根ニテ
頻ニタ、キ然未醬汁ヲ用テ煮熟シ食佳味
之有人益 酢貝亦煮テモ硬キハ難消化

切コシ貝ノ縁之硬キ処ヲ去リ膾ノ如クニ製リ
腸ヲモ和テ塩燻ヲ加ヘ壺ニ入封シ置ナレテ

食フ至テ美也 肉腸殼共ニ服ヲ明ラカニス腸
今誠ニ甚寒ナリ

本草ニ弘景蕪菜石決明ト鰓魚ヲ一物トス蕪
頌ト時珍ハ一種ニ類トス

牡蠣

蒙古貢 和名加木 石花共書ニヤ頊城郡山

之下ノ浦濱同郡笠島村ニ在三島郡野積浦間
瀬浦ニ最多シ形馬ノ蹄如ク殼粗ク岩ノ如シ
四時雖在之六七月盛ニテ肉肥テ味甚耳味也
冬春捕事 雪風寒氣甚辛苦也亦采得テ

テモ肉瘦テ硬ク暑中トハ味各別劣レリ
中国辺ト時侯大ニ異ナリ大坂表ニテハ冬盛ニテ
味至テ美也

凡蛤蚌之属皆有胎生卵生獨此化生純雄ニノ
無雌故名牡本草原始曰左顧ル者雄之故名
牡蛎醫書ニ以左顧者為佳左顧トハ其口東ノ
方ニ向タルヲ云是陶カ説ナリ

卑湿之家ニ牡蛎ノ殻ヲ多地ノ下ニ埋メハ能水ヲ
メクヲシ去湿又灰ニ燒為^{ミラツキト}堊塗壁以代石灰

栄螺

和名佐在江 螺ハ總号也種類甚多ク形團
尾盤曲尖リ岨嶮アリ間々ニ角狀在口圓ク
殻厚ク殻ノ大サ二三寸

諸郡岩在洋ニハ皆有石決明ニ次テノ佳品厨
中ノ賞スル者ナリ 壺熬殻トモニ湯煮シテ
肉ヲ振出シ切テ再殻ニ盛輕大ニ削リ下底置
豆油ヲ入テ殻ノ外ヨリ燒能煮熟シテ最佳
味也此貝調味ノ第一ト稱ス或ハ生ナルヲ殻
ヲ碎キ膾トシ其外ノ用數品在肉堅シ消化
シカタクレ病人虛人不可食

蓼螺

大平螺和名阿木 小辛螺和名仁之
狀宋螺ニ似テ畧長ク頭尖リ尻尖リ殼外外
色黄白ク肉ノ色赤ク肉甘味硬シ腸味甚味辣
也最希ニ在之

赤螺

辛螺ヨリ形短シ殼猶厚ク外畧赤ク内紅シ
肉味好然トモ坚硬シ病者虚人必不可食又甚
稀ニ出 殼ヲ灰ニ焼テ藥ニ入
殼ニ塩ヲ盛藪繁蓼ノ汁ヲ少ツ、右ノ塩ノ内へ

貝子

頻々ニ加へ入テ焼ヘシ七返オヤキテ末シ齒
ニスリ付テ腫ヲ消シ痛ヲ止メ齒ヲ固クス又湯
ニ入ロラス、キ目ヲ洗ヘハ牙ヲ堅ク眼明カニス

貝齒白貝海肥 俗云子安貝又寶貝

形微櫛ノ子ニ似テ長ク背隆ク亀之如背腹之
下兩開キ相向テ齒刻アリ長サ六七分ソノ
イ口淡紫或淡紅淡青也相傳テ婦人臨産
之時掌中ニ握之産易シ故ニ子易ト名付海馬ト功同
何方之浦濱ニモ波ニ打寄ラレテ海蛤之中ニ

雜リテ在洋ニ住女童部共拾米テ猫貝ト称シ
彈碁サシテ玩フ

旅行之節相洲江島ニテ見シ者長サ寸余大ナル
事粟ノ如ク最美也

本草曰雲南ニ多用テ為錢貨交易

説文曰古者未有錢以貝子為貨至秦廢貝
行錢而後見錢

○回春弟七卷牙疳之搽菜清香散之内海巴

出 ○竹取物語ニ云石上中納言ツクラメ子
安貝ヲ末ノソコナヒテアナカヒ十ノワサヤトノ

タマイナルヨリ思フニ遣フ事ヲカヒナキト云
トナリ 源氏物語ニモ引所ナリ

竹取物語之カクヤ姫ハ人皇三十四代欽明天皇ノ
御宇也太子傳ニ見ヘタリ

河貝子

蝸螺 蝿俗字 和名美奈 俗ニ云仁奈國俗云

ヒシラウシ、山沢溪澗之中ニ生ス形田螺ニ似テ細
長ク寸斗色黒シ食苔潔シ最淡味也

天蛇毒ト瘡有手足之指ニ生ス末生スルヲ俗ニ
ウラフト、云本ニ生スルヲ本フト云早ク治セサ

レ六指ク弁リ切ル、事アリ河貝子ヲ焼キ存
性為末泔糊ニ和シ腫タル指ニ皆塗上ニ紙ヲ
掩ヘシロ未見ハ不殘塗ヘシロ既見ハ口ニ成
處ヲアケテ可塗此藥大ニ驗有也其餘系
越タリ右和方ナリ貝原
本細此物難死誤リ泥カ壁中数年ヲ猶活ナリ
同肉耳治氷腫黃疽醒酒痔脫肛小便不通モノ
抹泥ニテ敷手足 三才圖繪云羸生溪澗中
者ハナハタ小ナリ食苔而繁羸今作螺
藥入河貝子可用海螺又潮入処者不可用

蜆

頭虫 形蛤ニ似テ中脹テ圓ク横ニ細ナルキサ筋
在色黒シ殻ノ内青ク光リ小キ者七八分大ナル
寸余能候風雨以殻飛 刈羽郡柏崎之鶴川ニ
肥大ナル者アリ 蒲原郡鳥屋野浮沼重松崎
島見源 磐石郡海府洋カン川浦右ノ処ノ
皆佳味也 本草肉耳取汁洗痘癰無癢痕
煮汁浴之能治黃疽又肉ヲ食

田螺

和名大都比 俗云太仁之水田泥中ニ多ク生ス

狀蝸牛ニ似テ尖リ長ク青黃色大サ寸斗二日
以上ヲ清水ヲ養テ食スレハ泥氣ナクテ好性
寒、肉堅虛寒、人病人不可食

本草ニ能多シ俗ニ云田螺ト苺子同食殺人
用田螺肉爲糊繼破磁罍永不離

靈螺子

棘甲螺海膽石楹 和名字仁當國俗ニ云カセ
其貌橘ニ似テ圓ク甲脹レ芒刺有暖ノ真中
ニ口在芒刺黒シ又一種無芒刺色淡紺ニテ
苺子ノ粒ノ如キ鮫肌ナル在 浦くへ折節

貽貝

波ニ寄ラル斗ニテ醢ナト製ホトノ余慶ハナシ
海中澳ノ岩上ニ生又崖ノ岩ニモ生ス小ナルヲ
黒口ト云長サ八九分寸斗大ナル者淡菜ト云
長サ五六寸狀畧山女ニ似テ黒ク内ハ淡青ク
光ル 三島郡石地駅ノ海ニ多シ夏月捕之
肉ノ色淡紅煮テ白シ味蛤ニ似テ耳ノ佳味也
御媛記ニ余皇日疏引テ文留ハ似女陰味頗
可也留即淡菜云リ 本草一名東海大夫ト
云其形ヲ以名付ト云 同日華曰雖形狀

不典之能合 同煮熟後毛去再レ菜菔紫
蘓冬瓜十ト加煮食味好性良乾食良佳

馬刀 カラスカイ

俗ニ烏貝江海泥中ニ有狀貽貝ニ似テ長サ一
斗色黒シ下品有毒

玉玼 タマシ

馬甲 其浦ニ在形上大キニ下窄ク長サ七八
寸似烏帽子汝黒色内ハ吉下虫色ニ肉腸不
堪食一之肉柱アリ白キ事 如玉故名玉玼味
耳ク上饌ニ其殼一片可爲華筵

蛭 ヒナ

一名總角但大成者也 稀ニ浦濱ニ居大サ如
指小キ竹ノ管ニ似リ殼ノ外鼠色微紫ヲ帯
内ハ白シ周ヲ懼トシテ食不佳味

蠅 アハカ

生蠅 希ニ出海泥之中ニ生ス形畧銀杏ノ葉ニ
似テ毛アリ剥之滑ニ内外玉玼ノ色ニ似リ小
ナル者七八分大ナルハ二寸余

勢烈ニ多シ其珠光沢謂之伊勢真珠
本草ニ河中ニモ亦有之其馬刀相似肉頗冷

即君子

相思子

小羸子

和名抄

玉蓋

小螺子之蓋

俗ニ醋貝

浦洋ノ渚ニ波風ノ日ニ打寄ラレテ間在寺泊浦
小間力脚崎ニハ往々出狀棠螺ニ似テ大サ五六分
灰白ニテ畧淡茶褐色小キ唇アリ大サ三四分
圓ク扁シ碧リ白色是又棠螺之蓋ニ彷彿リ
磁罾或ハ蓋ニ醋ヲ入テ玉蓋ヲ浸セハ即盤旋
シテ不已相逐貌ニ似リ見女以扇戲但殼ト蓋
ト多ク別ニ成テ寄来ル
本州大サ如豆臈筵筒積歲不壞若シ置醋

中盤旋テ不已ニ婦人難産手把之便生極驗

和名抄云小螺子

和名之太く美

似甲羸而細小有白玉

之蓋者ハ玉蓋

和名之太く美乃不太

加多之貝

海崖ノ上ニ着テ生ヌ形陳笠ノ如ク背甲高ク
尖リ口濶ク蓋ナシ旋リテ後リ縦筋アリ黒ク班
也内ハ碧色大サ七八分斗又稀ニ鮮明白ナル者
アリ最美也凡浦人ノ稱スル処ニ吸物トシ食テ
淡味ナリ性漢名未知

閩書曰蠃生海中附石殼如鹿蹄殼上肉下大

如薙卵

千鳥貝

俗稱也形微即君子似之淡黃茶色淡白モ有
細刻ノ縦筋在小ナル者五六分大ナルハ一二寸余
此貝間瀬浦ニ在中ニモ大ナル者千鳥ニ化シテ
夕暮方ナト殻ノ中ヨリ立出テ行ヲ浦人往々
見ル他ノ濱ニ在事ヲ未聞

鷓貝

此貝色白ク狀乍白鷓ナトノ水上ニ浮ノルニ似リ
小ナルハ六七分大ナル者一三寸斗此者カイ石ノ
穴ノ中ニ生シ其穴ノ廣狹ニ應シ生長シタル者
力又外ニテ生長シ已カ形ノ大小次第ニ穴ヲ
求テ居事乎

鮎船

鴛鴦螺 正字

何レノ浦ヘモ十月之頃ヨリ波ニユラレテ寄来
ル螺大ナル者七八寸小キ者二三寸色白ク淡黄
ニ亦純白也形秋海棠ノ葉ノ如ク葵之文理
皺紋在可愛多ク船ノ吹寄ル中ニ小キ草
魚ノ乗来事往々有之鮎色白ク足扁ク常
之者トハ異也兩年ヲ殻ノ肩ニ出シ兩足ヲ

殻ノ後ニ出シカキヤラ權竿ノ象ヲナシ游行シ来此者多在八凶年ナリト申傳ケレ共サノミ其兆シトモ鳳凰貝葵貝乙姫貝皆俗稱也漢名未知殻形器ト賞シ釣花生ナト別而面白ケレ共薄ク晚ク不堪用

寄居虫

此方彼方浦濱ニアリ状微蝸牛ニ似テ黑白紋班ニ大サ六七分殻ノ中ニ小キ有蟬殻ヲ負ナカラ片身ヲ出シテ渚ヲ走り這行ク最真力ル鉢ニ潮ヲ汲テ投入置兒童戯玩トス解之

即縮テ如螺キリ我キ在古ト云モ同類ナルヘシ孝ニ数品之貝殻ニ生スルト云ヲ以見レハ寓生シテ寄生木ト相類寺泊浦ニアルモノ貝殻一種之貝也是ハ又前ニ云千鳥貝ノ如ク化生シタル者乎

本草寄居虫海辺アリ在螺殼間非螺也候螺蛤同即自出食フ蛤欲合已還殻中在電殻中者名曰蝟

同南海有一種似蜘蛛入螺殼中負殻而走觸之即縮如螺火ニテ炙乃一名野

考ニ當國之者ハ野ナレハシ 一歳浪花表ニテ
讀列之産寄居虫之醢ヲ夕ウヘケル最異風
ナル者ニ加久ヨリハ軟上アリトカヤ

陽遂足

沙濱ハ爪ヲ吹寄ル形雞冠木ノ葉ニ似テ五足
アリテ扁ク甲淡紺ニ微赤キ帶細刻文ニテ較
朧ニ腹ハ白ク正中ニ口在頭尾眼目ヲ不知大サ
二寸斗

海燕

俗云餅貝 花籃カタミ 名目之部ニ 沙濱ニ寄来狀

圓ク大サ八九分寸余似馬錢子背灰白括梗
花之文在ソノウラ之真中口アリ其旁ニ有
五路正勾文是亦首尾眼目不弁 本草海燕
ノ下ニ陽遂足ヲ出爲ニ物也然共可別程

海蛤

和名宇無木乃加比 海邊皆在諸貝殼風波
ニ久ク晒サレ無旧形ヲ云
本草ニ諸蛤殼爲海水礮斫日久無旧質不
能分別爲何蛤故通謂之海蛤

歌仙貝

三十六種此は昔の貝の名目なる者なり
つねにるを名取ありすは後人の撰なり
夏いすはあはれに

簾貝

波のうらみ吹上の簾乃簾貝風吹やち移るを拾つて

忘貝

順徳院

二津の濱磯の忘貝木はさきと暮れ松の枝のさ

梅花貝

源俊頼

春風小浪や織久陸奥の心離るるは春のほかへ

花貝

枝がふらふらまは波はおもやちりくある子代の花貝

櫻貝

定家

伊勢の海は花貝なる櫻貝うらむる海の春はしらけ

よき貝

西行

壇海にすき貝は小貝拾ふはもりの濱と云やけりん

け系貝

よえん人あふり

あはれまの貝よる海のふらふら浪の海をせとえしる

撫子貝

西行

子あふりむ撫子貝よあはれをや海とあはれしる

波間栝

籬波め、かこす栝を、板石とふ日も、昔も、月栝

礎貝

よえん人志

契金一石の、漏れ、新更てうてる、礎の、いも、なうりき

枕貝

大江廣重

船世も、筏の、波路の、枕貝、う、飛、何、る、着、小、ぬ、こ、う、の、やは

錦貝

三條院

小、我、さ、せ、小、さ、張、法、く、し、せ、よ、お、う、ひ、と、綿、の、浦、と、又、由、る、制、り、る

貝

よえん人志

い、海、く、此、貝、何、り、て、こ、を、栝、は、兜、か、ち、く、さ、此、濱、は、海、土、ま、ま、く

梵貝

寂蓮

山、即、れ、何、の、吹、峯、は、夕、考、よ、そ、こ、世、も、志、す、か

都貝

よえん人志

世、も、志、す、風、の、志、す、方、法、名、よ、負、る、都、貝、を、り、先、を、り、い、ぬ、侍

衣之律貝

敦隆

田、鶴、さ、り、何、の、本、お、さ、う、さ、る、て、浦、う、た、貝、は、捨、ひ、は、る、う、ね

子多貝

よえん人志

さ、り、き、一、志、す、形、産、此、山、は、何、水、也、を、い、し、海、土、は、り、さ、ぬ

子多貝

よえん人志

濱、子、多、貝、是、何、の、は、り、か、い、う、は、何、も、浦、も、あ、る、さ、い、ぬ、や、ハ

刺真貝いさごのたけのこ よき人志るは

波よほる舟のふりば有う飛うさし世も海はひより

板屋貝 信實

阿也あやもうふばけしきくた貝はゆめ法師あひなむた

阿古郎貝 西行

阿也ゆきあ貝れうた法ん動て宝はゆめ又はるなりも

懷貝 牡丹花

るく世の恋はよいてはくせん何りの貝は己うおもひを

かきし貝 後花園院

我神といふかきし貝あてぬも波きりかぬく

うき世貝いさごのたけのこ よき人志るは

波のうきみよの浦のうき世貝わがしかきし我やぬき

才がし貝 高基院

海志高しそまの浦よよる貝の身はくはなま本そてぬき

あざり貝 光俊

伊勢の浦は志る飛くあざり来ぬる

塩貝 師魚

いせの浦は浦の塩貝播ふてぬ飾袖のぬきくもこうと

よみのり貝 よき人志るは

たのりき物何貝のきぬ魚地法の蓮の浦よきをよけ

かゝる貝 鴨長明

たのこつた人の洗のたは貝のぬれつたもの

10-1 貝

津守冬国

あをらや信子内なる貝の色をとかれるかき

溝貝

あまの人あはに

江の濱に海貝捨ふうかい子のたをまたふ人か

蛤貝

西行

今うたふる二尺の浦に蛤貝のせとふあふり

蜆貝

為尹

あまのさるの浦のあまのふらふらふらふら

小貝

原師光

伊勢の海より幾許の浦に小貝捨り玉

千種貝

あまの人あはに

君の代のためをえぬる千種の貝はあまの

百種貝名目

古人之倭歌多

曹貝

お茶貝

なかくし貝

かた子貝

高濱貝

濱かつ貝

鏡貝

ほろ貝

霞貝

えせ貝

乙女貝

磯貝

鷗貝

己れか

寶貝

あま貝

磯枕	袖貝	世もの貝	志きく貝
鞆貝	かゝ貝	杜鵑	鶯小貝
孔雀貝	鷓鴣貝	鶉貝	菊貝
鷄貝	烏貝	舶貝	志小貝
蓑貝	翁貝	赤貝	玉貝
筵貝	釜貝	加波貝	若貝
角貝	竹子貝	る土貝	やせ貝
少角貝	陸子貝	きき貝	志免貝
久二貝	ふね	まき	花貝
亀貝	いづく貝	冬貝	ぬく貝

ねりき貝	ふね貝	鷹賀	風貝
姫浅刺	す貝	うす紫	法一
屋をり	太刀貝	かき	田貝
緑貝	袂貝	貽貝	かゝる
小萩貝	たけのこ	千代苺貝	日貝
月貝	まき	車貝	七子貝
蟬貝	箬貝	アシカサ 臺笠貝	山椒貝
小梅貝	セコ貝	露貝	唐貝
雞冠木貝	濱木	いぬ貝	白う巻
白まき	志き玉	志人珠	名形

鼈

鼈團魚神守 和名加波加采 俗云須豆保羊
又ダウカノ 池沼渾川 皆在狀圓ク蛇頭四足觸
レ六頭足皆縮ム春陸ニ上リ穴ヲ掘テ卵ヲ生
夏ニ至リヒトリカサシ孳ル又甚大小有小ハ二三寸大
ナルハ二三尺人間ヲ害ス
本草ニ性平或冷 同補内益氣補不足
同頭陰乾而脫肛陰脫治 藥ニ用ル散魚甲ハ
即スシホシノ甲也近世醫師モ藥肆モ海

中木カメノ甲ヲ用ユ大ニ誤リ
鼈肉能升提於下陷氣故ニ久浮止下血治脫
肛收夏月土用捕塩藏麻止久春増佳如此之
功本草不載之是雖水物有温補性貝原云々
本草鼈身有異者皆能害人又合食之禁多
可有觀薄荷煮害人

龜

浦ノ漁子ノ網ニカ、リテ上ル夏間在之又波風
烈シキ日打上ケラル、事モ折節アリ三四
尺ノ余モ有漁人燒炙リテ油ヲ取り春陸ノ

土中ニ子ヲ生又亀肉ヲハ不可食
古昔亀トハ腹之板ヲ用_レ以_テ荆ヤク其文ヨリ
テ吉凶ヲ知法アリ

亀甲亀板ハ物ニ物ト不可思又背腹上下
共ニ甲ト云然モ亀甲ハ即亀板腹下之板
也 本草称敗亀板ト亀小而腹下曾_レ
鑽十遍者名敗亀版入糸良ハ敗亀板ト
ハ亀トニ久ク用タル腹下ノ板ト云但背ノ殼
モ甲ト云腹ノ板ヲモ甲ト云亦古者上下ノ
甲皆用之至日藥如テ版ヲ用テ後人遂至之

貝原云今數書ヲ見ルニ決可以腹下之版為
亀甲 草李曰亀尿可以_レ和墨寫字入石
此ヲ以テ重紙押印ニ印ニシテ能下ニ透ル
亀溺治聾_耳中爪不語_{取溺法朱塗}
折敷ニ亀ヲ置其影ノウウルヲ見尿出又荷
葉ノ上ニ又松葉ヲ以テ鼻ヲ刺ハ尿出
本草水亀甲與三百六十而神龜為之長
多壽也不可輕殺之老則神年至八百大
如錢夏則游香荷冬則藏於藕節其息
有黑氣如燻煙在荷心狀甚分明或云被

蚊嚼則死

龜鹿靈而有壽龜首常藏

向腹能通任脉故取其甲養

秦龜極大而壽可卜者曰靈龜年五百

歲能變化者曰靈龜伏於蒼草下或游

於卷耳芥葉之上其頭或頭或前臑骨陰

乾佩之入出不恙

秦龜俗云石龜

龜品類多々悉々雜弁

和尚魚

三島郡浦洋稀ニ山ニ事在陸へ毛来ル其

狀鱉ニ似テ人ノ面頭ニ毛無故ニ海坊主ト

云色淡黒見之時ニ烏不祥漁者利ト云怨

時ニ六眼大ニ甚怖レ宝曆ニ甲五月

上旬ヨリ六月中旬旬同寺泊浦人當リ折節

来リ磯ニ在船中渚陸ニテモ見ル

三才因會云東洋大海中在和尚魚狀如

鱉其身

蟹虫

蟹横行ハ山谷沢川ニ在種類多其形圓ク

足八ハ鉗ハ甲堅扁ク横行ス

山沢溪谷ニ生スル者因俗ニ沢蟹ト云大サ六

七分一寸四五分甲ノ色栗ニ似リ賤民ハ食
甚下品也性不分明本草ニ白石蟹ノ類ナルガ
新浮港ノ地又近村トモニ砂原ニ穴ヲ掘テ
栖蟹在里民拘蟹ト云リ見入便走ル蟪蛄
ノ同類在毒不可食俾民新浮之鎮守白山
宮之使者ト申傳曾テ不為殺夥ク敏多
テ耕作ヲ妨甚為害

蟹虫久ク泥沙之内有ハ化シテ成石ト
凡蟹虫ノ殻外腹ノ下ニ卵ヲ生ヌ
中華ハ海味稀少也故以此等為佳味傳耽

蟹之譜アリ又文士之詩賦不少

統博物志陳藏器云蟹脚之中體及卵殼
中黃並能統斷絕筋骨碎之山微熬肉創中
筋即連 筋ヲ統ニ山中石川ニ有津蟹ヲ

用ニ殻ニ付ケル黃肉ヲ土器入陰乾ニシ末シテ
乳汁ニ和シ疵ノ側ニ付ヘシ疵ヲ洗度ニ付ヘシ

○蟹黃能治漆瘡又食鮮中毒者蟹クヲウ
則鮮ス亦熬燒煙可集鼠於庭

蟪蛄

蟪蛄處蟪 何ニ島蟹 浦々ニ在至テ深キ海

擁斂蟹

底在魚場ニ栖故ニ漁子ハ吞魚場蟹ト称シ
又ヨシカニト云甚大ナル者アリ甲一尺四五寸
足三尺余螯甚大ニ至テ刀強シ
鮮虫之肉三旬不同上旬下旬肉多シ中旬月之
間ハ肉少シ亦捕テ程経ル者肉少シ
本網刀強八月能共虎闘虎不知之
築歩執火 狀一之螯ハ大ニ一之螯ハ少シ以テ大
螯闘ヒ小螯ヲ以テ食物
冬春海ヨリ捕ル大ナル者佳味也煮熟ス

蠟

レハ変純赤色取白肉食其黄最母ク美也
黄甲 浦々ニ在狀尋常之者大抵不異磯近
ク栖漁子渡鮮虫ト云又澳ニモ居

